

明治二十六年一月廿六日

(内務省許可)

# 義太夫雜誌

第七號



義太夫雜誌第七號目次

義太夫謠曲の壽天

初對面

翼々居士に明解を望む

義太夫語昔日譚

紀海音小傳

本誌の盛大を祝して

小清嬢に與ふて

はり扇(二)

長谷川兜軍記阿古屋琴責の段

素巴奴記(一)

七文字屋主人に答ふ

在京女義太夫諸姐品々進上東

淨瑠璃語り方心得

聲曲雜話

吾妻座福柳景况

有髮の事に就て

馬追船頭お乳の人と云ふ事

綱太夫の事

部屋の符課語(未完)

竹本播摩太夫歸京附文樂座の事

會の紛議

粹多樂誌情歌數首

太平記忠臣講釋

編輯の都合より上るり十二段と相模入道千

疋犬次號より續々掲載致します

骨皮道人

桃の屋主

硯海醉人

梨亭金升樂

驚すみ

花の家鉚月

傍若無人

堅胃堂主人

是和亭史

あふひ女史

蟬々子

未廣家要人

辨香醉史

壽亭主人

竹坡情仙

是和亭主人

竹坡情仙

是和亭主人

是和亭主人

是和亭主人

是和亭主人

是和亭主人

是和亭主人

是和亭主人

義太夫雜誌改良廣告

常義太夫雜誌の儀幸ひに粹様方の御引立に依り彼の三號と云へる大厄も無難も過ぎ續で第六號まで發行致し候得共未だ誌面に不完全の所も尠からざれば此際目覺しき大改良を爲し聊か御愛顧の萬一に酬ひんと略計畫の折から恰も好し斯道熱心の方々よりいとも懇ろなる御忠告等も有之候旁茲に先づ第一着として當時の文壇の老將一奇獨特の滑稽博士と世に聞へたる骨皮道人君を聘して之が顧問と爲したれば所謂錦上花を添へ龍虎翼を得たるの思ひあり猶今後は着々歩を進めて善盡し美盡すの用意も已に整頓致し候得ば何卒倍舊御最負御引立の程偏よ奉願候敬白

義太夫雜誌社

義太夫雜誌

第七號

明治廿六年  
八月三十一日

發兌

論說

義太夫 謠曲の壽夭 (承前)

燧石用器時代の鋼鐵時代と懸隔せるに均く。我國運も蒸氣機關の世と共に更に一別世界の如く豹變してより。爰に又人間の腦裏に一大變動を興へたり。地方の妖怪屋敷は鐵路の擴張に従て跡を斷ち。狗神系狐憑等の發狂病と理學の進歩に従て絶無となり。之を説くも人之を信せず。爰に至て音樂の進歩も一層優美精妙あらざるべからず。蓋音樂の思想のみ獨他の思想より離るゝを得されはなり。義太夫固より優美痛快の謠曲なり。然れども世俗に通し易きを此道の示要としたれば中みは聞くに忍びざる汚醜の世話物あり是他なし。斯道が徳川氏黔首を愚にするの政畧を取る世の中に成熟したるの結果なり。今や學術は妙を究め新を競ふて進じてと日々に駿矣。庠序の設けは都鄙み遍矣。庶民の嗜好も日を逐ふて高尚に趣き。美術家は古代の優美を慕ひ音樂家も歐米中華の粹を探り近來大に我國諸樂の度を進めむんとするの兆あり。琵琶謠曲も亦大に振起せむんとするの兆あり。細棹淨瑠璃の純然俗情を穿つものは貴顯紳士の忌憚する所となり。年を逐ふて衰透に趣

くの色あり。然るに義太夫謡曲は一種特別獨立獨歩の樂あれは未だ是等の衰退者も相伴せざるの色は見へすと雖も。亦大に進歩の度を現はさず。音近來は我輩社會の刺戟の効績見へ來りて。都市の諸方村落の諷に至るまで。日々に素人義太夫の會合あるを見る。此際新し起る技術家あり又潛みし者の現はるゝもあるべしと雖も。未だ幾許の進歩を加ふるの色を見ず。只一般の流行物たるに過ぎざれば一旦其熱度を失ふ時と又冷却し去るの日あるを恐る。尙今日にして是等の憂ふべき所を戒め改良すべき所を改良せざれば義太夫謡曲は何れの日か行はるべき。彼の條約改正實施の日に於ては貴紳の爲には賤まれ。文明の人には笑はれむ。若適宜之に改良を加へ。大に弊害のある所を一洗せば却て東洋一種の奇藝として。外國人も賞賛欣慕するに至るべし。

(未 完)

## 漫 言

## ○ 初 對 面

骨 皮 道 人

御免……お頼み……今日は、表も客あり案内を請ふ事再三、取次人の猪尾助罷り出て、是は被爲入い貴郎は何方のお方で、私はは紺屋町の岡田で、紺屋町の何と云ふお方で、エ、岡田廉二と申しまして、成ほど分りました夫では矢張り御連中の御方ですね、と猪尾助は早呑込み、先生御連中のお方が被爲入いました、道人はサツパリ了解ない、が、兎に角お通し申せ、と例の百疊敷の百分の三の座敷へ請じ、見れば筋骨逞しふして美髯蓬々、骨皮流を以て一言これを評すれば、先づビスマークの影法師とも稱へつべき人である、夫より

一通り世間並の、お暑う御座い左様で御座いの挨拶も濟み、猶ほ能く御名刺を拜見すれば、是なん當時義太夫學の熱心家に其人ありと知られたる、同雜誌の社主岡田康二君に予ありける、道人と吃驚、オヤ／＼／＼人は見掛に依らないとは成程なアと驚いた、ソコで其來意を聞けば、即ち同雜誌改良の相談、爾來道人も助刀を頼むとの事である、道人と少しく困った、ナゼ困ったかと云ふに道人は元孔子様の遺言を守って居る男で、文字ある者は必らず武備ありと云ふから、蚤や虱を捻り殺すには拇指の爪一ツで用が足るとか、或ひは往來に制札が建て居れば、ハ、一此處は往來止だなど云ふ位の事は、別に大學校のお世話に預らずとも、チャーンと天然自然に承知して居る、けれども義太夫だの常盤津だのと來た日には、生憎と論孟の中にも書て無いゆゑ、枕と云ふのは何で拵へたものやら、叩き掛りと云ふのは何様な物を以て撲り付るのやら、イヤモウ何が何だか蟹が噓だか、滅茶／＼の分らずやである、故に此御相談は殆んど當惑任つった、去ながら道人は書のが營業、殊に負惜みの強ひ置なれば、決して知らんとは云はない、假ひ義太夫本の上へ脚を這はしてありども、何にか斯まか附會やうと云ふ了箇、依て助刀の儀も誠又無造作さうに、ハ、一義太夫雜誌の改良、成ほを助筆、宜しい慥に承知しました及ばずながら、など、極々手輕に請合へば、岡田君はウツカリポント買被つて、夫では何分お頼み申すと、適れ鬼の片腕でも取た氣で、意氣揚々と立去られしは、可笑くもあり又た氣の毒な次第なりし、

其跡よて道人以爲く、元來義太夫ておものは、盲目の學問たとか勸善懲惡だとか云へど、義太夫語りの名人ぢやとて親孝行の褒美を貰つた例しも無ければ、如何に五行本が鮮明なればとて小學校の教科書には用ゐ

られず、時とするは糠味噲に蓋をさせる連中はあれども、義太夫の力も依ていろは藏を建たと云ふ人もなし、シテ見ると是も矢張り氣保養の道具、胃病や留飲を癒す振出し薬と心得て居て差支へない、と斯う手前勝手曲尺は當て見るときは、何の義太夫の奥の手を知らないでも、随分書くべき事云ふべき事は澤山あると云ふ一風違つた妙多見當を附た、故に今後道人が此誌上に於て燒舌繰る事柄に就て、若しも諸君の癢に障る事があれば、成べく遠慮して黙止して居て、成程と感服する事があつたら、其時のヤンヤ／＼とお譽下さるやうに願ひ度、猶ほ夫がお嫌なら……エ、面倒臭い、假ひ聞人があらうが無からうが道人は其様な事には頓着しない、道人の一人で筆記語りする積まり、

寄書

翼々居士の明解を望む 桃の屋主人

前號忠臣講釋の文句に就て翼々居士は余が誤解を正されたるは流石、斯道御熱心の熱度も知られて深く感謝する所なり然るに其事たる居士の探る所と余が視る所とは全然反對に出たるより斯く迄解釋を異にせしなり余は其場の文句は徹頭徹尾作者の假作も出てたるもの

と認められたればこそ太白星が光を奪はるゝも又他の光を奪ひ取るも勝手次第ながら成るべくと一の太白星の光を衆星の奪ふ方が多數の義士が一の師直を討つ吉兆としては事實に適したりと思へるまゝを論述せしなれ又孫吳か詞とあるは忠臣藏九段目に『此繪圖こそは孫吳が秘書』といふに同じく兵家の詞といふも差支るけれど語意弱き故確めんとして孫吳が詞といひたるまでにて是亦作者が例の造語に出たることと看過せしなりざるを居士は之も反して堅く孫吳兩書の金言玉語とし

余は其場の文句は備頭備員作者の創作。出たはた

孫吳は此敵討の如く敵は一人味方は多數の義士と

いふ者の爲に教へしにはあらざるべし孫吳の時

戦國なれば一方に三軍あれば敵も亦三軍の師あ

るべし戦國の吳の皆邦力戦畧の競争なれば事情

之に比すべき者は少し(中畧)殊に孫子吳子別人

ふして共に云ひ習はせし普通の詞と思へは左まで

こむつけるにも及ばず

云々と孫子が謂ふ所の正々の謀堂々の陣を張りて

春秋左氏傳講義的の解釋余が爲めに下されたるは意外

の幸榮にして篤く其勞を謝せざる可らざるをり就ては

太白星云々の語は余が愛讀せる魏武帝註孫子十三篇中

には斯る文字は見當らず吳子にも亦ありしや否淺學寡

聞知るまよしなし只願くは何々の書に孫吳両子が解か

れたるものにや其原文を抄出して詳かに證せられん

ことを敢て再び其明解を望む。



### 貴所益々御隆盛之段奉慶賀候

硯海 醉人

兎角時候の加減かして氣が轉倒致し迎も眞面目にて

と御願申事叶はず候故甚だ欲禮よは御座候へ共滑稽

(積り)交りよて申上候に付未御遊樂と終迄御閱讀被

下度奉願上候之とても決して惡る氣にて申上るには

無之候に付何卒御掛念被下まじく候

秋去り冬歸り春往きて金を鑠かすの候とはなりみけり

とは云へ北極以内は暑を避るで無く南極以内は冷を買

ふで無く矢張平均温度十三度三分の江戸に蟄居して唯

書冊に眼を曝すのみして冷豆腐に青紫蘇位よて腹を肥

し床几に腰を掛け團扇片手よ蚊を厭ふて夕涼み日光へ

行けば華嚴の瀧の落ち工合が氣に喰はん伊香保は偏俣

でいかん大磯は色が黒ふなると變理屈萬遍ア、東京ト

つぶやく男は之と申そ技能無く只口へ茶碗を運搬する

が一の特技にして此の娑婆に現はれてよりの精尊は六

万三千三百九十二杯にして之を満邊無く通運した御兄

様は動物園の様だが元は大阪の産にして今は江戸表第  
 四大區八小區に籠城致す漢にて之でギヤツト生れりや  
 水道の水で湯棺した御兄様で氣取れども什麼ある様目  
 か悲き事よは上野邊で逍遙すれば旦那御廟、動物園、  
 兩大師さんへ御案内致しますと車夫の勸むる面惡さ東  
 京へ來ては大阪言葉を噠はれ之で歸れば又東京言葉を  
 笑はるゝ不首尾落語家では無きよ一生笑はれて果るの  
 かと思へば去年の秋の煩ひに（御定りの胃病）一層死  
 で仕舞たら斯した難儀はせぬ者と思へ共先年ありし憲  
 法の發布よより國事犯と出獄を許され私も同時に人間  
 の籍に連候（顔は素との細胞より組織せらるゝが故  
 に殺人面（即ち佛蘭西語にてUncontenableと申す者を  
 私之を無理譯せし者あれば税の不要らぬ事故笑たけれ  
 ば笑ひ給へ）故別に目づらし者好と申す譯よは無之候  
 得共兎角人様の眞似のみ致度醫師の診斷に依れば耶蘇  
 紀元前二百卅八九年の頃埃及國に流行したる格麻兒病

とか申す厄介病の由にて殊も四季の代り目よは烈しく  
 氷の黒焼を呑めば全愈すとの事に御座候が之を我が身  
 で一生脊負て立つのかと思へば實に心細き次第にて元  
 は蝶よ花よと愛でられたる棒様が此難儀かと聞ば照や  
 影よ初菊が泣ならんが是も前世の約束と霧降山の奥  
 住ひせつなき胸を撫で下し空を眺でくやみけり斯る所  
 へ現はれ出たる義太夫雜誌見上奉れば鐵漿黒々と細眉  
 毛年は未だ十六の若士の艷美は島田さんの御身のあだ  
 例の格麻兒病を喚び起し我も五躰を具た男一匹有りど  
 有ゆる脳味噌を絞りなばせめては人様の御笑ひ種よな  
 るかと寐ては夢醒ては居眠考へッ、暮し居候所此節よ  
 至り一件の病症重と同時に義太夫語りの昔日譚と申  
 す者訂し候が之れても唯滿邊無く文字を並べしの方に  
 して面白くなく可笑くなく味も素氣も無く歸天齋正一  
 も三舍を避る位の奇々妙々の者にして逆も綾之助の阿  
 波鳴門順禮歌の段、小緑の源平布引瀧三人上戸の段、

八重子の仙臺萩政箇忠義之段、或子の古臺八重子の



八重子の仙臺萩政岡忠義之段、越子の古雪松三段目中

將姫雪責之段、一二三の菅原傳授寺子屋之段、小清三

勝半七酒屋之段、音女の腰越狀三段目泉三郎館之段、

駒之助朝顔日記宿屋之段、燕玉の於夏清十郎縁切之段

綱巴津の佐倉曙宗五郎子別れの段、小政の三十三間

堂棟由來等の如く（以上は私見にて候）各々得意を

演ずるが如きには及ばざれども綾之助には伊賀越一二

三には千本櫻三段目と云毒物あると等しく私も之を以

て一字千金の貴誌へ御掲載の義相願ふては「不覺なり

万次郎」と太閤記的の御叱を蒙るやも謀られず候へ共

此の男見掛より由ず面の皮中々に厚く何と申す意氣込に

て（原稿共）紙上を以て御願申上候より付瀉蕨なる貴君!!!

何卒私の赤心と他愛のなき所を御憫察被遊六號なり七

號なりの活字にてても宜く御座候に付貴誌の隅へなど御

掲載被下度伏て奉祈願候、此御願御聞濟被下候は御

所のためより揮て盡力仕度き心組に御座候（生意氣）謹言

豊竹小緑

性質清廉潔白ふして義侠心も富めり其嘗

て稚き一朋兒と路傍に遊べるより一人の豆

腐賣味噌漉し豆腐一丁を入れて駈け來れ

り朋兒誤て之を突き當り豆腐を大地に落

したりざれば豆腐賣朋兒を責むる事急な

り小緑之がために分疏すれども聞かず是

に於て小緑馳せて我が家に戻り母に錢を

貰ひ之を豆腐賣に贖ひて朋兒の難を援ひ

たり

（二）駿馬幼にして既に峻あり

竹本綾の助

性質伶俐にして何事に係はらず熱心にし

て且忍耐力に富めり其斯道より入らんとぞ

る發起は未だ年少ながら路傍を歩むも常

に口三味線を謂ひつゝ嘗て家に彈線の音

聞ゆれば數時を厭はず必ず靜聽し朋の誘

ふ事あれば「此から御稽古」を口實として  
避くるを常とす故に近隣の人呼で生辨天  
と稱す

(三) 罪を惡で人を惡ます

竹本越子 性質温和柔順にして親に孝あり嬢六歳の  
時天滿天神社の祭祀に詣で歸途或る店頭  
に余念無く佇めり然るに一人の貧兒誤て  
嬢の足を踏めり越子之を責めざるに貧兒  
深く之を謝す嬢大に其心に感じて貧兒に  
錢を與へて立ち去れり

(四) 淮陰

豊竹音女 性謹直常に寡言を好み人に事を秘するを  
潔とせず嘗て師が門を叩く時朋兒誤て師  
が家の襖を破り責を音女に歸す音女沈黙  
亦一言を發せず然れども此の無冤の罪は  
深く骨髓に徹し日夜黽勉怠る事無く終に

其朋兒を凌駕するに至る(時に音女八歳  
他兒は十三歳)

(五) 能者

竹本京枝 京枝が家世々弓師を營み京都よて名家の  
聞へあり或る日一人の客ありて種々の品  
を出させ檢分するが如くにして檢分する  
に非ず唯々よ奥座敷の三弦を聞けり京枝  
が父焦て之を納めんとそれども客更に頓  
着せず耳を放たずして聞き居り頓て問ふ  
て曰く「彼の於子さんは何歳です」父答  
ふる所「七歳です」と客大に感じて「將來  
多望の於子さんです」と客は即ち大阪に  
て有名ある住太夫なりとぞ然して先きよ  
三弦を弾せしは京枝あり

(六) 親切

竹本綱巴津 富貴の門に生れながら性至て謙遜よして

未だ人に一の誇言を發せず嘗て師が門を叩く時朋に一貧兒ありて書冊を購ふの余

裕無し綱巴津之を傍觀するに忍びず我稽

古終るも戻らず師之を問へば今「於杉さ

んが來るのを待つ」と（杉とは貧兒の名

あり）師大ニ嘉し綱巴津彼の稽古終るを

待て共に歸り書冊を貸して彼が家ニ戻らしむ

(七) 尊 敬

豊竹鶴蝶 幼よして朋兒と共に里俗於坊ちやん子々

と云ふ遊技をなすも常に賓客として尊敬

せらるる故に近隣の童呼て「於い、とさん子

々」と呼ぶ（いととは金高いと云ふて鶴蝶の本名あり）

(不完)



傳 記

紀海音小傳

峰の家霞

姓榎並俗稱喜右衛門後に善八契周又貞賊と號す鯛屋貞柳の弟なり和州柿本寺に入り僧となりしが還俗して大坂に住し醫を業とす戯作を好み西澤一風に從ふて數種を著述す元文元年法橋（契因）ニ叙せられ寛保二年十月四日没す年八十大阪寺町寶樹寺ニ葬る法名は

清潮院海音日法

文 園

本誌の盛大なるを祝して

下野 梨 樂

えら梅の野にも満たる匂ひ哉

小清嬢に與へて

鶯 亭 金 升

すししさの一夜くや竹の色

# はり扇(三)

かすみ

何をあてどもなく淺草公園を逍遙義田祐介。後から呼  
 止し聲に振向て『京地君か。大ろう麴の花が咲た子。  
 秘密的の愉快は罪ダ』と云ふ譯なら嬉しが子。實は先  
 刻の夕立ちに追かけられて。一直へ逃ぐて云ふ一件。  
 が君は今頃駒形あたりではない。此邊を一人逍遙は怪  
 しい子。待人ありと云ふ粹節でも『あれば結構だが此  
 面相では兎ても』角でも世の中をうるさいものと悟つ  
 た譯でもあるまい。遠慮は御無用話し玉へ『何を？』  
 とはららくくしい。隠すと瑠璃之助も云付るヨ『した  
 つて構はないサあんな奴に』其一言が聞かしたい。必  
 ず涙の種と來る子。と云ひながら小聲で。

口でけなすは浮名がこはさ

はらじやたがひよすいた中

『時よ君と云ふ癪があるから。心配は無駄の様だが。』

アノ大山とか云ふ男はなんダ。一寸見た處では。紳士  
 の極印付だ子。大分奮發の様だ。アノ縮緬幕も讀人知  
 れずだが。奴の寄進らしい。兎角油斷と大敵。六尺を  
 緩むべからずダ『銀行員だとの振込だ。大山四太郎  
 とは耳なれぬ名。大方狸連中だらうヨ』左様なら面白  
 い。一ツ探偵と出掛ようか。結果も因たら峰の家に話  
 して。義木夫雜誌の小説の材料にしてやる『まさかろ  
 んな事も。が探偵は面白子』面白サ君には云はるいが  
 僕は何事でも探偵するのが好だから。實瑠璃之助の事  
 に就ても探つた事があるのサ『何か聞出したか』今云  
 ふたどて信用せぬから。序の時よしよう『宜じやない  
 か云ふたつて。情夫でもあると云ふのか』其處までも  
 突止めぬが『他に怪しい事でも』『マもう暫らく待べしサ  
 其内に確と知らせよう』僕も少々疑ありサ。と話も氣  
 を取られ夢中で歩む折。寐て居し犬の尾を踏しかは犬  
 も驚き飛起ながら。ワン／＼『エ、吃驚した此畜生。』

(淨瑠璃)

長谷川 兜軍記阿古屋琴責の段  
千四作

花の家 鉦 月

鴨の脚短しと雖も是をつがばうれひなん鶴の脚長しと  
いへども是をたゝは悲みらん民を制すること此理よひ  
としくされは治る九重の源清き堀川御所當時鎌倉の嚴  
命に隨ひ秩父の庄司次郎重忠禁裏守護の代官として兼  
ての民の公事裁判私のはからひあく道にくもらむ増す  
鏡智仁の勇士と知られたり。

評曰 民心を和同するは人情に通ずると通せざるに  
にあり上たる人能く人情に通じて政をなせば天下の  
人も和同し人情も通せずして治ひれば一家の人も和  
同せざる也孔子の語に凡聖人の能く天下を以て一家  
の如くにし國中の人を一人の如くにするものは我意  
と以てするにはあらず必ず其情を知り其義又従ひ其

淨瑠璃

理又明かに其策に達し然して後に能くこれをする  
あり又君子民に臨て治るよ民の性を知て諸民の情も  
達せずんはあるべからずと云へり都て淨瑠璃をだ  
くさに見るべからず心を入て作者の教導を忘れす意  
氣を察して讀べきことならん俗よ通ずること手ぢか  
し

批

三三三

素巴奴記 (一) 牛込 傍若無人

世の女義木夫を評するもの一も二も無く其長所を擧げ  
て之を賞賛するに止まり批評の主眼たる駁議叱正の聲  
甚だ稀なり、曲言曲筆君子之を思ひ、直言直筆小人是  
を克くせず、斯の時に當つてとるよも七六ツケ敷くそ  
んあよ大層らしく言ふも及ねと茲に片つ端から一番  
手當り次第に素巴奴く命知らずは  
●野澤鶴蝶 何を語ツても關取よまるとの評あり乃ち

知る二代鑑の其の唯一の語り物なるを生つ粹の江戸ッ  
 子が兎角鼻は掛ッて樂屋で張るのと仲間も横平など云  
 ふ様子あれを誰れ一人尤むる者の無いはシツカリした  
 最負筋のだなはんがあるからとハ又とゑらい貫目でこ  
 んす

●鶴澤花友 嵐山の風鴨河の水で磨き上た白痘痕の奥  
 様然とした御面杓とシツトリとした藝風にて鶴蝶嬢と  
 共み確かなお旦那後見殿もあるとの事、淨瑠璃のう  
 まいもんだと賞めろやす黒がりもあれば面白くないと  
 スケ丈は我慢して聞くへコ帯もあり、どうやら一ト昔

し到の看板が思ひ出されていやモ御氣もじ  
 ●竹本越子 右田作事件以來火の消わたやうだと云ふ  
 者、腹の無い浄るりは師匠の身振見苦るしいものサと  
 ホザク奴三生の三味線勿体なしとヌカス、人双手は高  
 坐へ擲き付ける右の膝頭は痛いだらうと氣を操む方、  
 ハテ蒼蠅さいは人の口、不潔いは、犬の糞一さかりの

景氣とは拙者も何んとか云ひたれど又赤坂近在から  
 喧嘩でも持込まれては社の迷惑と筆を洗ッて此節はど  
 うですとも何んとも知らぬ振

●竹本小住 三味線の慥かなもの男の様を音べがある  
 とは一般の取沙汰、腕前程に咽前へ理に落ちて面白  
 みは矢張り一ト昔前程に聞かれぬは一意今でハ大夫を引立  
 て、腕は氣を入れ咽を止めし故なるべしとは或る黒う  
 人の御言察をり、何處やらの恵比壽様丹似て居るよし  
 なれど御機嫌の折はともあれ、風義矯正、正義派の總  
 大將随分六ツヶしろうでウツカリ住ちやんのお尻は狙  
 はれませぬぞ、

●竹本綾の助 曰く川上、曰く梅三、曰く誰、曰く何、  
 予ハ信せし大抵は其の虚構の臆説なるを、梨園に成福  
 あるも猶此嬢の人氣に如かず、何處の寄席、何の評、  
 大入あらざるハ無く賞揚せざるはなし、然りと雖も傍  
 若無人として言たい事を言はしめよ、淨るり決して甘

きに非ず、只其聲の婉なるのみ、容貌何んぞ美と云は  
ん、唯其の色の白きのみ、聲の婉なるを聞かんと欲せ  
り去つて清元新内に聞け、色の白きを見んと欲せば行  
て十軒店の内裏様を拜め、嬢又好のんで大物を演す太  
十日吉の如き住之助より下の數等(酷?)人或は其無邪氣  
可憐を稱す、否々ケン坊主、散髪、チヨン鬚、扱てこ  
双眼鏡然たる稚子鬚、ツツルテンの胸高男帶、勉め  
て無邪氣を粧ひ、無理に可憐に擬す、年己より又九(慥  
あり)加ふるゝ艶聞を以てす(七月十四日都新聞等其例  
の一)形あつて影あり、打てば則ち響く、風評豈悉く捨  
つる可けんや(取消亦悉く信ずる可足す)ひるき連如何。

### 七文字屋主人に答ふ

青山 堅胃堂主人

本紙前號に見て見ぬ人なる題下に於て君が攻撃を受  
けしものは予を依て其要旨のある處を尋ぬるゝ彼の  
評は或人の語なりと記せしを以て固より自家の言に非  
ざれば責を帯ぶる筈なし則ち責なきものゝ對し結問す  
るは見て見ぬ人に非ずして何ぞやとの御論鋒をるが

如し然れども餘りに結構ならざる御言葉謹んで受納する  
譯にも參らざれば返却致さん乞ふ少しく言ふ處あらし  
めよ可ならんか成程君は慥に自家直接の言と書せざり  
しよは違ひあり然れども聊か思ひ始め君が筆を饒舌欄  
に染むるゝ當り些の覺悟する處非りし乎又君が弄する  
片々たる文字は數百人の目より角觸るゝものたるま  
どを知らざりしや知らずと云はゞ固より論ずるに及ば  
ざれども相當の責任あること等は御承知ありしあるべ  
し左れば饒舌欄に於ける微笑先生と其文情とを以て彼  
の記事を見れば君が理由とする處と何の價値ありや且つ  
僅々九行の文字に於て其三分の一を費せしことを思へ  
ゝ君の意思たるもの潦然たるゝあらずやよし或人の評  
にして自家は全く不賛成なりしとするも其位置と責任  
とに考慮を及ぼさず自ら進で其責を負ふ筈の譯なり左  
れば予は其幽靈的の評者に云はずして直に君に一言せ  
しもの至當にあらずや微笑君予は尙ほ見て見ぬ人ぢ  
るべきや否々其然らざりしことは足下已に首肯せしな  
らん依て是より前號み云々せし所以のものと言はん一

は本誌の爲にして他と君の爲なりしなり敢て問ふ義太夫雜誌は何の爲に發刊するやを斯道の衰頽を挽回し其を掲げ美を現はし后進を笑礪し先輩を扶助せんが爲めにあらざるか又君の饒舌欄を筆を揮ふ事批評に渡るを以て一層慎重を加へざる可らざるものたることは知つらん而て其饒舌欄なるものを見よ事悉く輕浮にして直み彼等矯々の身軀に向て毒刃を擲つが如き酷なるものあるよあらずや彼の評の如きも實に此に類するものなり彼郷にして果て評言の如きものあらは是を攻撃する情を忍びざるものあらんも斯道の爲め一針を加ふるも可なり但其如き時は充分事實を撰索し其欠点を列撰して彼をして判然覺るに至らしむ可く又辨解することあらば辨解の要を得せしむべし彼の尤も忌むべき卑語を人に加へて其理由に至ては毫末も辨せざる如きは苟も文事ある君が輩のなすべきことならんや是君の爲め貴紙の爲め慎重を加へられんことを一言せし所以なり乞ふ詰りしとのみ思ふこと勿れ

君は前號に於て見て見ぬ人を好敵手なりと云へり左れば予は茲に君の一失能く堅胃堂を貫きしと言はんとす阿々  
 扱て君は尙微笑しつゝありや序なれと一言すべし君と眞に小説と義太夫雜誌的餘興と同一性質のものなりと思はるゝ如き人なりや筆の迂りと言はば、可あれども敢て問ふ又『ソンジョ』と云ふ意味解せずと云はれたり茲に好例あり呈せん乎『ソンヂョソコラ』とは如何其の下にソレ／＼の語を入れられしは尙ほ良からん一方の方言と思ふも可なり  
 予と吾とよ、を付せられしは何の意たるや何にせよ文章上の責は足下にあるなり。

微笑曰 朦益、朦を加へ見て見ぬ人自ら證す世は文盲の者而已ならず少しく省よ文も亦小學校落第的の者答ふるの責なきも誤解の點は次號に示さん青山の没曉漢次號の紙上を見て以て醒めよ敢て曰ふ。



東紫郎投

在京女義太夫諸姐に左の品々を進上申す  
但し當人の意に叶ふや否やわ諸君の判断に  
依る

竹本綾之助嬢へ

女大學壹冊

竹本越子嬢へ

白のへこ帯に自然木のステッキ一本

竹本小土佐嬢へ

花笠に金棒壹組

竹本小清嬢へ

改進新聞の投票用紙澤山

豊竹錦嬢へ

横綱又化粧まわゑ

竹本小政嬢へ

野上氏の傳授書一冊

竹本駒之助嬢へ

牛乳に玉子澤山

竹本京子嬢へ

蒔繪の櫛に花簪

竹本乙女嬢へ

百貫の生石一ツ

豊竹一二三嬢へ

友禪染の振袖に舞扇一本

雜 録

淨瑠璃語方小話

是和亭是和

竹本播磨椽常又門弟に云へるあり稽古の時は聲の使ひ  
方節の語り工合及間合の取り方等は一心不乱お師匠の  
眞似をすべしゆかに登りたる時は師匠と眞似とを胸中  
より追出し我心の儘に語るべし然る時は自ら自分の精  
神現はれ淨瑠璃が我ものと成る故あ下手なりとも聞か  
れるものなり之に反して師の教方に泥し師の眞似をせ  
んとおもふ時は即ち淨瑠璃の人のものとなるゆゑいく  
ら節を能く眞似るも精神至らざれば聞きにくきものな  
りといふは實歴上の話なるべし世の「太十」稽古の輩以  
爲如何。

ふたくと

本郷 あふひ女史

○うれしからぬもの。

よき寄席へ出る時聲のかれたる、

幕まくくれて恩おんにきせたる、

樂屋がくやへ來きてかれこれとはなしする、

前まへにて無暗むやみ身みさわがしく云いふ、

語かたれるうちよ人のたぢゆく、

文句もんくにつきさしづがましく云いふ、

○うれしきもの。

思おもふように聲こゑの出いでこのほかうけたる、

日ひにまし入いりのふへゆく、

名な高たかき人ひとより後幕うしろまくくれたる、

出方でかたの折せりあひ合あひよろしき、

ほめことばを陰かげできく、

或人あるひとのたづねられたるに、斯かもあらむかと答こたへたる

を、かいつけてお笑わらいのたねにたくりぬ。

聲曲雜話

蟬 々 子

○團平だんぺいは文樂座ぶんがくざの間者かんじやなり

の知しる處ところ嘗かつて彦六座ひころくざに出い出るや太夫たゆうよして同丈どうぢやうよ並ならぶも

團平丈だんぺいじやうの妙技みぎなるは人ひと

の無なく皆みな其その技ぎに攻せめられて或あるは略血りやくけ或あるは眩暈けんうんを起おこし永なが

くも五日ごにちを重かさねねず皆みな云いふ團平だんぺいは文樂座ぶんがくざの間者かんじや三味線みせんを

以もつて彦六ひころくの太夫たゆうを殺ころしよ來くるなりと技ぎの優すぐれるや知しる

べし今いまや大隅丈おほすみ並ならび立たち而しかして平然へいぜんたり大隅丈おほすみの技ぎも亦また

凡ほんならざるを知るべし

○達たと迎むかへ 土佐丈とさじやうは云いふ鎌倉三代記かまくらさんだいぎ三浦別みづらべの段だんに『

親達おやたちも夫おつまよは見みかへぬか』と云いふ文字もじあり達たては意い

味通みつうせず大分迎おほかたむかひの誤あやまりらん淨瑠璃本じやうるりほんは草書そうしょゆへ達たと迎むか

似にたるより讀誤よみあまりて斯かとなりしものと思おもふと話はなしぬ。

○聲こゑとツボ 素人しろうどは皆みな聲こゑのよきをのみ上手じやうずありと云い

へとツボに合ありぬ聲こゑは如何いかによきとも上手じやうずと云いひ難がた

し而しかして今いまの太夫たゆうにはツボ并あり合ありぬ聲こゑの少すくなしと大隅丈おほすみ

は語かたりぬ。

○文網ぶんづなの事こと この丈かなかの勉強家べんきやうかなり嘗かつて土佐

丈たけに從したがひ地方興行ちほうこうぎやうの折せりあひ毎まい夜よ遅おそくより何いづれへか出行いっしゆ故連

中ちゆうに惡あしき噂うわさもありしが或ある夜よ竊しそかに覗のぞみしに臥床ふしどに入り

て淨瑠璃本を讀み居しが連中の寐靜まると何れへか出行き一時間餘も經て歸り又臥床に入り今度と節付よて其本を讀み後眠よ就きぬ一夜付をひ見しに密かに師の宿に稽古にゆきたり或日此由を師匠よ問しに汝も彼を眞似よと戒められし事ありし(小土佐嬢の話)

因曰 當時は師匠と弟子の連中は別の旅宿にて三町程隔りたりと。

### 吾妻座 青柳 一座景况

末廣家 要 人

全座員木村武之祐君より練磨會々員一同招待を受し故要人も御仲間入して會員諸氏と共に去る廿七日見物せしが非常の景氣よて八月五六日頃まで日延するとの事一番目龍虎丸甲板上の場に文朝の三味線よて松尾龍の義太夫出語りは實に恐れ入つたもの此れ場に出る(福井茂兵衛)の助田貞一は余り奇麗なのでこれが前幕の書生車夫だとは思はなかつた(木村猛夫)のお村は仕

草よ於ては申し分なけれと作りが藝妓上りとは見へず何うしても銘酒屋か矢場の姉さん上りの様なりし併し米藏と聲の掛るは御盛々(木村武之祐)の船長は箝り役にて申分なし(青柳捨三郎)の大澤信忠は河崎屋張りにて貞一の爲めお殺さるゝ迄無難

### 有髮の事よ就て

瓣 香 醉 史

『一の谷嬾軍記』は並木宗輔の傑作たる事は已に世人の知了する處にして余も然く思ひしなり然るを釣深亭君には近松半二都一鳥合作の如く余が談じたる様に記るされしは如何等の間違には相違なし而して有髮の事に就き桃。釣二賢の説孰れも一理あるが如きも余の釣君に説きたるも先年或る書よて讀みたる事の覺ぬ居しまよを話せしものあれは強ち余が見解而已にと非るなり頃日學海居士の新評(戯曲十種)甲の卷を閲せしに有髮の相としてあり成程相は形にして想は思なり相は

外にして想は内なり相は有形にして見るべくも想は無  
形されば見るべからず故に相とをさ方妥當ならん然も  
彼の時代は餘り博識の筆者に乏しければマサカ相を想  
と誤寫したるやも知れず暫く記して識者をまつ

### 馬追船頭お乳の人と云ふ事

樂壽亭主人

馬追船頭お乳の人は古より云傳ふる所なるが其意味  
の何れにある者にや知る人少し寶永元年の印本「心中  
大鑑」に「馬追船頭お乳の果髪結も口の悪い仲間とて  
云々」とあるよれば口のわるいが同じと云ふものと  
見ゆ巢林子の染別手綱の上は重の井の詞「船頭馬方お  
乳の人此方も其方と同じこと」とあ如何のものにや知  
る人は教へてよ。

### 綱太夫の事

个坡清仙

先祖綱太夫の門弟は山城の大椽あり自分綱太夫の名を  
繼ぐ可きもチャリ語りなるを以て遠慮し後門弟を譲ら

んとせしが其機なくて見合しぬ大椽の門弟中錚々たる  
者は濱太夫殿母太夫（之後は織太夫と改め次て綱太夫  
の名を襲ふ）なり江州八幡にて興行の際殿母太夫師に  
迫て濱太夫の切を語らんことを望み許されず自ら髪を  
斷ち一卦の書置を殘し八日市へ遁れ止る一年半時に元  
治元年にて廿五歳なりしと其間浮世畫床本書きを以て  
糊口し又入塵は妙を得たり後大阪因幡藥師の女義太夫  
席の眞打を勤めし太夫（名は失念せり）の入夫とある其  
當時大阪の人氣少しく浮薄に流れ風俗も亦東京を學び  
藝人素人を論せず昵みしかは従て藝も清元新内の大に  
流行するに至る頼母太夫身東京へ生れ新内に長せり此  
に於て春太夫の一座を加はり堀江の芝居にて興行専ら  
新内の工調にて語りしかハ大に人氣を得たり時又明治  
四年織太夫にて明烏を語りしなり此頃師山城の大椽貧  
して餓谷に住居す織太夫之を尋ね詫びて勘當を許され  
併して綱太夫の名義を譲らる然れども後是れ胡摩かし

調ぶとに而て綱つな太た夫ゆうの名なに面めんしては此この調かじを語かたる能あたわす語かたらさ  
 れじんまと人じん氣まろし進しん退たい極きまり遂ついに志こころを立たて新まんない内ない調かじの盛さかなる東  
 京けいお歸かへり憶おぼせす綱つな太た夫ゆうにて興こう行ぎやうせしかば人じん氣まに適てきし名  
 聲せい一時いちじに昇のぼる其その今いまよ人口ひびとに蝶ちやう々くさるゝは實じつに彼かれが奇き智ち  
 の然しからしめしありと聞きがままよ記しす。

部屋ぶくやの符ぶ諜てう語ご

是和亭主人

一いち圓まゐヲ一いちゲンヘイ五ご拾じ錢せん コこゲンヘイ錢ぜに シンしんタたロ  
 金かね ナなカかタイ有あル ゼぜケけル 無ない ゼぜケけヌ  
 人ひとの事こと ドウどうジク 自じ分ぶん事こと ゼぜメ 母おシしんパち  
 親おや父ちち コこタたマ 亭てい主しゆ シしんテン 妻おカかミさん  
 子こ供ども エえコこタたロウ 藝げい妓しや コこロろゲ 娘むすめ ガがリ  
 女によう郎ろう ヤやンんタたロウ 女によう中ちゆうセせコ 男おとこ ビびんコ  
 後ご家け チちヤやウうケ 坊ぼく主しゆ ヒひノのキきダだマ 客きやく キきんチちヤやン  
 買かい事じ マまウ 太た夫ゆう イいタたザざエえモもン 撥はつ シしヤやクくイいダ  
 三さん絃せん彈だん キきヨよクくリりコこツつゲげ 素す人じん タたロろシしロウ 使つか ヒひカかツつキ  
 淨じよう瑠る理り コこアあミ 語かたる事こと クくツつル 死い バばレれル

三さん味み線せん キきヨよクくリ 人じん形ぎやう ゲげニ 顔かほ ナなカ、ラらツ  
 結むす髮ふく事こと マまツつル 妨かる事こと ハはマル 頭あたま シしミみセせんン  
 非ひ人にん ゴごロろサ 老らう人じん ヨよリりト 髮け トとんビ  
 盜ど賊ぞく ゲげんシしロウ 角す力ちから 子こジじヘへい 目め コこツつパぱリ  
 玉たま子こ ツつハはサ 香かうの物もの ゴごロろタ 口くち サさヘへいジ  
 菜さいの物もの アあテ 蕎そば麥をく喰く グぐル 鼻はな シしロろサ  
 茶ちや碗わん トとシしキ 羽は 織オリ ハはんムむキ 聲こゑ エえコ  
 芝しば居い シしんキきウうマイ 田い 舍なか ドどサ 飯はん サさいイいコ  
 助すけ倍べい者もの ゴごんゾうウ 接せつ 吻ぶん 十じゅう郎らう 肴さかな タたツつポ  
 惡あしき事こと セせクくチちイ 馬うま 鹿か 金きん太た郎らう 酒さけ セせいイいザ  
 酒さけに醉よ フふんタたロー 夜よ 這はい ナなタたニにカかマル 粥かゆ トとロろケ  
 金かね 持もち ゴごウうマ 無な 錢ぜに ヒひコ 鹽しお シしヤやウうチちヤやウ  
 大だい便べん漏ろう ゼぜコこヲをフふカかス 小せう 便べん シしバ 湯ゆ タたロろク

(以下次號)

雜報

○日本播磨太夫歸京附文樂座の事 同丈は去る七月

十五日午前九時新橋着の嵐車にて歸京したり同丈ハ文樂座にて四回の興行せり最初は『三芳野勝次郎御所車』

二度目は『三十三間堂棟由來』三度目は『八百屋お七』四度目は『伊勢音頭戀恨又』なり京大阪に愛顧

頗る多く爲めに文樂座主より引留められたるも暑中休中越路太夫廣助は前年名古屋興行の日残り云々あるも

より堺を七日興行し名古屋に入るよし故津太夫と共に西京に興行おし吳と京の井筒より依頼ありたるも今度

は長尾太夫に文樂座の追出しを語らせたる故一と先歸京を心ざし急に十三日に文樂を打上げ十四日に歸京せ

しなりと(竹本小住嬢報)

○義太夫社會の紛議 津賀太夫織太夫等が澤村座横濱等にて太棹芝居を始めてより義太夫社會に紛議の起り

たる次第を聞く元來義太夫社會の慣例として歌舞伎道に出るものは一年若くは半年交代となし其れも賃して遣るとの名議ゆへ芝居にても丁寧の取扱を爲し來りしが芝居の方は給金の好き上に折々浴衣手拭等を貰ひ結句利益の多ければ遂に義太夫座元へ歸らず遂に内々隠れて出勤する様になり在來の浩券を下げたる上に弊風續出しければ斯くていならじと夫々制裁を設けし

も劇場の多く出來たる今日殆ど制し切れず殊に津賀太夫織太夫等が芝居を爲すに至りては仲間を對して濟まぬのみか大坂へ聞えて面目なき次第ありとて古例を守

る人々は痛く其非を鳴ら年行司語息齋の語助は其職を辭せし趣にて義太夫大坂が本元なりとは云へ輩穀の下たる東京に居れば自然位が付くべき者を自身と直

ちを下げる稼業の仕方情けなきに至りたりと語助は嘆息し居たり右丹付辭職思止る様説きしものあれと容易に應せざるやに聞けり(中央新聞)

○服部霞峰氏 避暑旅行として北陸及關西地方へ赴

きたれば又面白き種の追々紙上に現はるべし

○織太夫一座の大茶番 常市寺町の靜竹亭にて去

る十四日より興行さる竹本織太夫、鶴澤文藏、竹本津

賀太夫、竹澤龍造一座の義太夫は流石に目下東京よて

屈指の太夫及び三味線彈といひ殊には勇藏といひし頃

より撥を取つては利もの、文藏が相變らず達者なるは

聽客の耳を澄ましめ津賀太夫と織太夫どが艶物と滋味

を語り分へるよし記者は一作夜遅く行しゆへ聽かざり

し)又大切の大茶番の曾我の對面と白波五人男の若松

屋ゆすりの場なるが切の一と場を記者は一寸見たるが

何れも太掉へ乗る調子なれば太夫三味線彈としては仲

々の手際にて時代物なら免も角も斯る世話物を彼の位

にこなすは手柄なるが總べての評は文藏の玉嶋一當實

は日本駄右衛門は落着ありてよく津賀太夫の南郷力丸

は立派く織太夫の辨天小僧は梅幸寫し強て假聲を遣

はぬ處ろが身上なるべし其他は呂篤太夫の番頭與九郎

が適り役にて大設けあり併し一座が何れも達者なる音

聲と撥を聽かした上に此茶番を見せるとは大勉強なれ

と茶番は兎も角成るべくは文藏丈の腕前にてあざやか

なる曲彈が聽度しと或る義太夫通と云ひ居れり

(静岡日報)

○生駒太夫の一行 越中の富山にて過日來興行頗る

の好評の由。

常升用ゆる鍵の錆ることなし リシヤール



情 歌 題 ぐち。きぬく。たはこ。

○ 愛嬌連 よしの家櫻

吸付煙草が腹までしみて人にや知らない苦勞する。

○ 本郷 梅痴生

待てこぬ夜は何かど苦勞重ねて愚痴も出る。

○ 神田 笑亭美三絲

積る話も盡さぬうちに悪くやきぬく告げる雞。

○ 全上 おなじひと

主の浮氣が意にかゝりついに咄も愚痴となる。

○ 愛嬌連 波の家千鳥

昔のきぬくたがひの癖と今も二人が起おしむ。

○ 本郷 梅痴生

思ひあまつて火鉢にもたれ思案つくく吹く蓑。

○ 愛嬌連 末廣家要人

とめた昔を思へば愚痴も云だしかねたる主の前。

○ 下谷 比呂居士

未を案じりやこを出る愚痴よ何故に端た其仕打。

秀逸(本誌寄送) 神田 笑亭美三絲

堅い約束ぬしや煙にしていつか妾をわそれくさ。

會話調 司馬 天竺 浪人

付けて貰ふた貰はよぬが

是じやのめぬよ火が消へて

追加 粹多樓主人

今朝のわかれのつらさよもしと

しばしとめたさ出す煙草。

申はげ 今回は紙面の都合により粹のみを掲げ他を省

けり投書家怒り玉ふなイヤ怒るは野甫。

○ 次回の情歌題

笑 泣 迎 恨

九月十五日限かたくべきり

一名十五句限り名句より本誌呈

原稿用紙

投書家諸君にて本誌の原稿用紙を望の諸君へは實價に  
に譲り申上候



堅い約束ぬや煙にしていつか妾をわすれぬ

廣告

●寄贈書目

をこへ

東洋文學

音樂雜誌

東洋之華

扶桑

文明之兒童

新文海

鶴城新報

第六十號 發行所 目 堂  
岡山縣岡山市大字小橋町  
郵税共貳錢

第十號 發行所 智 發 堂  
千葉縣安房郡北條町北條  
郵税共五錢五厘

第二十二號 發行所 音樂雜誌社  
東京市麴町區有樂町三丁目一番地  
無郵税共六錢

第五號 發行所 東洋整社  
岐阜縣美濃國惠那郡福岡村  
無郵税共六錢

第八號 發行所 嶽 麓 社  
靜岡縣富士郡上井出村狩宿  
郵税共五錢五厘

第二十號 發行所 徽州文社  
備中國小田郡笠岡町大字笠岡  
郵税共二錢五厘

第六號 發行所 徽州文社  
備中國小田郡笠岡町大字笠岡  
郵税共四錢五厘

第六十二號 發行所 鶴城新報社  
伊豫國宇和島本町百十一番戶  
郵税共三錢五厘

上野停車場前山城屋旅舎

電話出願中  
家屋潤大各室呼鈴の備あり食物は衛生を主とし夜  
具は清潔にして凡て旅客の用を達するは迅速丁寧  
萬事油斷なく勉強任候間必ず第一泊の上御試を願  
ひ併て從來の御客様方にも猶一層御愛顧あらん事  
を祈る

●日本速記雜誌第六號

(一部定價金八錢 郵税七厘) 十部前金七十錢

●速記小言

見聞子

- (二十七) 大審院の人民控所
- (二十八) 速記用達社と速記社
- (二十九) 速記の正誤
- (三十) 辯士と速記者の關係
- (三十一) 速記者の衛生
- (三十二) 二個の速記學者

若林珪藏寄稿

●雜報

●速記懇話會記事 ●世界博覽會附屬速記者大會豫告 ●帝國日本に於ける速記術に關する報告書 ●關西速學會 ●大坂速記社 ●若林珪藏氏と友野茂三郎氏 ●豫告 ●速記之友

發行所

速記法研究會

東京市神田區裏猿樂町二番地

掲載種目  
俳句ニ關スル論說●古今俳人傳記●逸事●俳談●紀行●俳文●俳諧及發句ニシテ●發句ハ本評餘興別欄諸家新聲等ニ分ツ●發句締切ハ毎月十五日翌月廿日出版●其他ノ投稿ハ出版ノ十日前トス遅者ハ翌月へ廻ス●定價郵稅共一冊七錢六冊四拾錢要前金

●俳諧專門雜誌 其のよゝ  
(第十八回既發) 毎月一回發行

投吟注意  
本評●四季亂題四句一組入花六錢三組拾貳錢五組五錢十組廿錢余ハ一組壹錢宛●餘興●當季題三句一組入花參錢二カ一錢増●本評出吟者ハ本評二組ニ付餘興一組宛無料●其他詳細ハ見本ちらし等ニテ御承知アリタシ●見本ハ郵券六錢入花ハ郵券代用ヲ諾ス

静岡縣城東郡横須賀活版所内

發行所 月旦吟社

◎竹豊連 しらせ

竹豊連とは義太夫節を好む者が月一度打寄りて義太夫節に關する古今の珍話批評を相談せる一の同樂會なり集は第三土曜日の午後一時より始め連費は出席の折金五錢ツゝ持參の事凡ての報告は本誌に記載す 集會前日迄に欠席の知らせ無時は集る者を見做す 申込書には宿所姓名を記すべし委細は御來談の事 申込所は義太夫雜誌社の編輯局にて峰の家霞まで

(明治廿六年 三月六日 遞信省認可)

◎社社告!!!告社◎

●本誌の前金相切れ候時の發送の節帶封し朱書致候間御覽の上は速に御拂込被下度候尙御沙汰なき時は發送の儀見合申候此段前以て申上置候也

●本誌と凡て前金も候へは御注文のみにてわ發送せず ●本誌定價 一冊三錢五厘 (半ヶ年前金貳拾錢) (二ヶ年前分三拾八錢) 前金の分は本社へ地方の一冊に付郵送費五厘申受く

●廣告料 (五號活字) 一回四錢 十行以上一割引回数數並に義太夫謡曲に關する者も限り尙割引あり

●代金を替半圓以下は郵便切手にて可宜敷以上は神田郵便電信支局振込 (東京市神田區紺屋町四拾四番地義太夫雜誌社)宛に御認被下度候

●投書規則 投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等よして類似の者ある時は其優れたる者を掲載す○次號に譲し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時之を省く○誌上ハ匿名あるも投書は住所姓名なき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とし判明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書は返却せず○問合せハ往復はがきか又は郵券封入の事

明治廿六年八月三十日印刷 全 年八月三十一日發行

東京市神田區紺屋町四十四番地 發行兼編輯人 岡田 廉二 全 市牛込區天神町二十五番地 印刷 人 鶴見 應

發行所 義太夫雜誌社 東京市神田區紺屋町四十四番地

印刷所 東京市日本橋區南 明昇舎 茅場町四十八番地